

名古屋市

西部地域療育センターだより

正面壁画「友情」より

No.25

秋の訪れ

所長 鷺見 聡

厳しい残暑と大型台風の襲来が過ぎ去って、心地よい季節である秋が到来しました。スポーツをしたり、野山の散策をするには最適の季節です。また、秋の味覚を楽しんだり、静かに読書することにも適した季節だと思います。

ところで、日本で最も売れた本の一冊は、「窓ぎわのトットちゃん」(講談社)です。黒柳徹子さんによって書かれたこの本は、1981年に発刊され、700万部以

上の大ベストセラーになりました。そして30年の時を経て、最近再び注目されています。発達障害のお子さんを持つお母さんや、関係する方々に読まれているらしいので、私も改めて読み返してみました。トモ工学園のユニークな教育と子どもたち、時代が変わっても色褪せることないエピソードが満載です。

秋の夜長に、ご一読することをお勧めします。

平成 23 年度西部地域療育センター連続講座(平成 23 年6月 24 日)

— 幼児期のコミュニケーション支援 —

名古屋市西部地域療育センター 言語聴覚士 山口 大輔

西部地域療育センターの言語聴覚士、山口大輔です。言語聴覚士とは、ST(Speech Therapistの略)と呼ばれることもあるのですが、リハビリテーションの職種の一つです。仕事の内容は、ことばをはじめとしたコミュニケーションに関わる力についての評価・支援・助言が中心となります。

療育センターでのSTの業務なのですが、

①小児科医師の処方による、個別療法

(年中年長頃の年齢の、構音障害のお子さん・言語理解は良いが、表出の力が遅れているお子さんが中心)

②就園前グループ、通園への参加

③難聴が疑われるお子さんについて、医師の指示

による、聴力検査の実施の3点に大きく分かります。

今回の講演では、就園前の年齢のお子さんへの、やりとりの土台作りの支援、年中～年長頃のお子さんへの、学習支援のコツ、会話のやりとりの促しについて、STの視点からご説明します。

I. 就園前の時期のことばの遅れについて

1・2歳児で療育センターにことばの遅れを主訴として来られるお子さんについては、初診の後、療育グループで小集団の経験への参加をご紹介します場合が多いです。それぞれのお子さんについて遊び場

面での行動を良くみてみますと、主訴としては、ことばが遅れていることが全面に出ていますが、大人とのやりとりの関係作りが、0歳後半～1歳前半の段階にとどまっているお子さんが多いです。

この、0歳後半～1歳前半にかけては、ことばの発達の土台作りとなる大事な時期です。8カ月頃以降、お子さんの行動範囲が広がるにつれて、周りの物事について、それを日常の中で用いる中で頭の中でイメージが形作られていき、お子さんの行動は見通しあるものへと変化していきます。また、並行して、周りの人の働きかけに気付いて、反応を返していく中で、相手の働きかけの意味や、周りの物事の、ことばを含む社会的な意味に気付いていき、また、指示に応じた行動が育っていきます。

センターにみえるお子さんの行動を見てみると、「ひとり遊びになりやすい」、「働きかけても気づけない・意図をくみ取れない」、「遊びのやりとり場面や、集団場面で、集中が持続しない」などの行動がみられ、大人との持続したやりとりが成り立ちにくい印象があります。これらのお子さんの関わり方の弱さを細かくみていきますと、「注意の散り易さ」、「ひとつの気になることに注意が固着して、状況の全体を見渡すことができない」、「今気になっていることから気持ちを切り替えたり、新しいことを受け入れることにストレスがかかる」、「眼から入ってくる情報を上手に取り入れることができていない」といった、個々に認知の特性があることが背景要因として感じられます。これらのことは、周りの人の働きかけへの注目の弱さや、人と状況を関係づけて、相手の意図に気付くことの弱さにつながり、結果として、ことばの獲得や、集団での行動の取り方など、周りの人を通じて学ぶ必要のある学習に時間がかかる結果となっていると思われます。

ここで、周りの大人側が、お子さんに合った、やりとりを引き出していく環境をどのように作ってあげることが、鍵となってきます。とすると、お子さんが、一人で遊ぶことを望んでいると解釈して、お子さんをそのままにしてしまう、また、お子さんが場にそぐわない行動をとることで、大人からの関わり

りが行動を制止したり、注意することが中心になってしまう場合があるかと思います。これらのことは、周りの人との、適切な関わり方の経験の不足につながります。大事なことは、お子さんの個々の行動の特徴をつかんだ上で、いかにお子さんを大人の働きかけに気付かせて、反応を返すやりとりに引き込んでいくか、試行錯誤していきながら、よりよいやりとりの関係を作っていくことだと思います。

ここ数年、子どもの対人発達のこれまでの研究をもとに、周りの大人が、やりとりを介して子どもの対人認知を育てていくことを狙った優れたプログラムが内外で紹介されてきています。巻末の参考文献にいくつかお示ししていますので、興味のある方はご一読下さい。

以下に、お子さんとの基本的な関わり方のコツをまとめています。

ポイントとしては、「大人への注目の機会を増やす⇒大人の働きかけの理解を促す⇒働きかけに合った反応を促す」ことが大きな流れとなります。

1. やりとりにつなげやすい遊びの選択

まず、お子さんが好きな遊びをみつけて、それを大人と一緒に共有して遊ぶ方向に持っていくにはどうすればよいか、考えて試してみましょう。例えば、くすぐり遊びや、「高い高い」などの身体を使った遊びなどの、物を使わないシンプルな遊びは、特に、遊びがまだ広がっていないお子さんや、動き回ること自体が好きなアクティブなお子さんを、大人に気持ちが向かうようにするきっかけ作りとして有効です。また、シャボン玉を大人が吹いてあげたり、お子さんが好きな物事の絵を大人が描くような、大人と一緒にないと楽しめない遊びも、大人への注目や反応を引き出すことができます。

2. 要求の引き出し方

遊びの中で、一緒に楽しんでいた遊びを途中でやめてみることは、何かしらの要求行動を引き出していく上で有効です。例えば、運動模倣が育っているお子さんであれば、「もう一回？」に指のジェスチャーをつけて尋ねる形で、お子さんの模倣での要求の応答を引き出すことができます。また、表情や声のトーンを感情豊かに強調してみせたり、好きなものを見せるときに、はじめにわざと手の中に隠して、じらして期待させるようなことも、大人に注目



して分かうとする態度を育てていく上で大事なことです。また、行動の見通しが育ちつつあるお子さんの場合、「座ってくれたらまたできるよ」と指示するなど、お子さんがしたいことに絡めて行動の枠付けをすることもできます。

3. 分かりやすい指示の伝え方

指示の伝え方については、例えば、車でお出かけのときに車のキーをみせるなど、視覚的に分かるものを加えることや、行動のモデルを示すことなど、ことば以外の情報を付加すると、お子さんにとってより分かり易いです。お子さんのことばの理解の発達として、まず、起こっている状況の理解がすすんで、その後、それに付随することばとの関係性に気づいていくという順番なので、状況や物事メインで分かってもらい、それにことばを添えていく、という働きかけのほうが、理にかなっています。また、お子さんの持っているものについて「ちょうだい」ともらうときに、容器を用いる、お返事で声を出して欲しいときに、おもちゃのマイクを用いるといった、その行動をするときに使うものを用いると、お子さんの合った行動が出やすいこともあります。ことばかけの長さについては、お子さんが出ている発語の長さ+1の長さが目安といわれています。また、イントネーションを強調したり、場面で決まった言い方に統一することも、お子さんにとり分かり易いといわれています。

4. 模倣を育てる

模倣を促していくことも、この時期の発達にとって大事な要素です。模倣は、お子さんが、相手に持続して注目し、行動や気持ちを寄り添わせていく力につながります。また、動作模倣はジェスチャーに、音声模倣はことばに、先々展開していくことができます。療育グループでお子さんの様子を見ていても、大人の行動の模倣が芽生えてきつつあるお子さんは、指示の入りやすさや、行動のまとまりにも変化がみえてくるのがよくあります。長崎(2009)は、動作模倣について始めは大人の行動に注目して、個々の動作や物事を用いた行動を模倣することから、1歳ちょうどを境に、大人の行動の意図や活動の内容を理解して、役割交替ができるようになっていくと述べています。

模倣を育てていく最初の段階として、大人の行動

に注目が行かないお子さんの場合、子どもの動きを大人側が逆に真似することで、お子さんが、大人の行動に注目する機会が増えるきっかけとなるという報告があります(Nadel他,1999)。また、追いかけて、トランポリンを手をつないで一緒に跳ぶ、「よいしょよいしょ」と一緒にものを運ぶなど、大きな動きで、相手を意識しながら同じ行動をすることも大事な経験といえます。

相手に注目する機会が増えてきたら、手遊びも模倣を育てる上で有効な遊びとなります。初期の段階では、指先の細かい動きの模倣や、左右非対称な動きの模倣は難しいので、身体の部位を両手で左右対称に触るような、シンプルな動きの歌を選ばれるとよいと思います。模倣が芽生えたばかりのお子さんの場合、連鎖した動作を、大人が一方向的に歌い動作をみせていくのに従って即座に模倣するのは難しいことで、見て同じ動きを始めるまでにタイムラグがあったり、一瞬真似しても、すぐに気持ちが離れてやめてしまうことが多いです。ですので、対面で、大人がひとつの動きを示して、お子さんが模倣できているか確認しつつ、次の動きに移っていくほうが、お子さんにとって負担が少ないです。また、ことばの理解は育っているが、大人の動きを見てどう身体を動かせばいいのかぴんと来ないお子さんの場合、「あたま、トンだよ」等、身体部位の名前を入れてあげると、模倣が促しやすい場合もあります。また、手遊びの動きの模倣に、物事の意味を絡めることで、ジェスチャーを教えるきっかけにもなります。

5. 集団の利点

小集団での経験も、状況や指示に応じた行動を学習していくよい機会となります。センターでは、就園前のお子さんについて、療育グループをご紹介します。グループでは、活動内容として、

①毎週決まった流れで実施

②分かりやすい遊びや課題を通して、その場に合った行動を促していく

③そのときどきの活動に関係ない、お子さんが気が散る恐れのある刺激をなるべく片付ける

など、お子さんが学習しやすい環境作りについて配慮しています。一年を通してスタッフとして参加していますと、はじめは、司会のスタッフが提示することに全く関心を示さず、走り回っていたお子さんが、少しずつ席に座って前を注目する時間が長く

なっていくたり、流れに沿って、次にする行動を自分から取れるようになるなど、お子さんそれぞれの成長を見ることができます。

Ⅱ. 就学前のお子さんへの支援について

センターでのSTの支援について、低年齢のお子さんでは、これまでに伝えしたような、お子さんのやりとりの構えを作っていくための関係作りを、グループなどの場を通して、養育者の方と一緒に考えていく形の支援が中心となります。お子さんの年齢が上がっていった、3～4歳程度の発達年齢に達すると、机上の場で、新しいスキルを効率的に教えていきやすくなります。このことは、園での集団経験を通して応答関係が育って、遊びの文脈に絡めなくとも、ことばの指示で学ぶ構えができてきていること、それから、衝動性が軽減し、ことばの指示で行動のコントロールが容易になってくることにより

ます。

センターのSTの個別療法では、

- ①発音、文法（つなげて話す・助詞の機能の理解）、質問応答など、ことばに関するスキル

- ②ジェスチャー、写真カードなど、ことばに代わる伝達手段の獲得

- ③大小・色・ひらがなの読み・数などの、概念学習を中心に、個々のお子さんのニーズに合わせたサービスを提供しています。

1. 支援プログラム立案の考え方について

目標とするスキルは、お子さんの発達年齢と対照して、獲得できるはずのもので設定しています。養育者の方のニーズが、お子さんの現在の能力を大きく越える場合、まずは、そのスキルに関係する、より基礎的な能力から育てていきます。また、スキル獲得の足を引っ張っている直接の背景要因として、お子さんの中での弱い力が推測できることが多いです。

例えば、STでよくお会いするのが、発音に障害のあるお子さんなのですが、発音の獲得の遅れについてよくみられることとして、

- ①口の運動の不器用さ・未熟さの面

- ②ことばの音の情報を聞き分けたり、順に記憶する力の弱さ

という、異なる2つの要因が背景に感じられます。

支援していく中では、難聴、口蓋裂といった、発音に関係するほかの要因がないことを確認した上で、それぞれのお子さんに合ったプログラムをすすめていきます。個々の正しい発音を作るための舌などの口の運動を学習してもらうことに並行して、運動の不器用さからくる発音の誤りのお子さんの場合、口の器官の細かい運動コントロールの促し、音の聞き分けや記憶の弱さからくる発音の誤りのお子さんの場合、しりとりなどの、ことばの音の情報への感受性を高める遊びや、かな読みの学習を通して、個々の子音の音の違いや、ことばの音の並びについての意識を高めていくプログラムを盛り込む場合もあります。

また、別の例として、数概念のひとつの方略で、カウンティングでの個数の把握を身につけるためには、数のことばを順に憶える力、対象のものを順に眼で追っていく力、カウントした最後の数が、個数となるというルールを理解の力などが必要とされます。ここで、例えば、聴覚的な記憶の弱いお子さんですと、数えてもらうと数をとばして言うてしまう、また、課題の理解なしに、儀式的に行動を丸覚えしてしまうお子さんですと、カウンティングは上手にできても、何個あったか尋ねると答えられない、といった、お子さんそれぞれの弱さに応じた間違い方が、みとれます。

このように、個々のスキルを教えるにあたって、その獲得を阻害するお子さん個々の弱さが推測される場合が多いので、検査や行動観察を通して把握して、それをもとにプログラムを立てるようにしています。（この考え方については、学齢の学習障害のお子さんに対するアプローチの考え方が雛型となっています。）また、支援していく中で、学習全般でネックになるような、衝動性や飽きやすさ、新しいことの受け入れの遅さ、くじけやすさなどの認知面の弱さを合わせ持っているお子さんもみえます。以下に、実際に学習をすすめるにあたっての、お子さんの特徴に応じた配慮の例をまとめています。

まず、よくみられる、飽きやすいお子さん、注意の散りやすいお子さんについてです。集中のスパンが短いので、こまめに小休憩を入れたり、課題を進めるのに応じて、ちょっとした報酬を少しずつ与えていくことや、終わりの見通しを眼で見える形で与えることが有効です。ST場面では、例えば、課題が進むに従って、パズルを1ピースずつ与えていっ

て、パズルが完成したらおしまい、としたりしています。また、課題が終わったらできるごほうびの遊びについて、お子さんと約束した上で、写真や文字でそのことについて脇に提示しておくことで、モチベーションを維持できる場合もあります。次に、カーテンを閉める、空調の音を弱めにするなど、課題に必要な、気が散りやすい情報を取り除くことも大事です。お子さんによっては、においに敏感な場合もありますので、コロンや整髪料に注意すべき場合もあると思います。待てないお子さんの場合、課題間の準備の合間などで、片付けを手伝ってもらう、お絵かきなど、ひとりでできる課題をしてもらうなど、手持ち無沙汰な時間を作らない工夫も有効です。

学齢のお子さん向けの課題になるに従って、行程が複雑なものも出てきます。この場合、いくつか行程を分割して憶えてもらい、後から統合する方法をとったり、始めは手がかりを与えて、だんだん抜いていく過程をとったりします。また、直接的な指示について、受身に従ってはくれるのですが、自分で憶える姿勢の弱いお子さんもみえます。その場合、始めは直接的な指示を与えて、だんだん「次は何するんだっけ」など、間接的な示唆に変えていって、お子さんが自発的に気づいていく方向に促すやり方も有効です。このことに関連する研究として、Landry他（2000）の健常児を対象とした研究では、親の指示の与え方について、2歳台の児では「～してね」といった直接的な指示がより有効だったのに反して、3歳台の児では、直接的な指示よりも、お子さん自身に考えさせるような示唆を与えるほうが、より有効だったと報告しています。

次に、新しい情報を受け入れることに時間がかかったり、相手の指示に応じて行動することに抵抗感のあるお子さんもみえます。この場合、まずは、お子さんが興味を持てる課題を通して、指示に応じる構えを育てていくことから始めます。具体的には、お子さんの好きそうな題材を示して、興味を示した

ら、はじめはお子さんのやりたい遊び方で大人と一緒に参加する中で、少しずつ大人側が課題に沿った遊び方を提案、お子さんが受け入れてくれるか様子をみつつ、すり合わせていく方向に持っていきます。また、お子さんの好きなキャラクターなどを絡めた課題を提示すると、興味を示して取り組んでももらえる場合もあります。

ちょっとした失敗にめげやすく、課題に取り組みたがらないお子さんもみえます。こうしたお子さんには、例えば、お子さんが簡単にできる課題を多めにする、大人との勝敗の要素を課題に盛り込み、大人がわざと間違えて、お子さんが勝つ方向に持っていく、などの工夫を盛り込むことで、自信を失わず、課題に向き合えるように配慮しています。

2. 質問応答の発達とその支援

次に、質問応答の発達と、その促しについてご紹介します。一般に、質問応答の発達は、健常のお子さんにおいて、

～2歳台

目の前で起こっていることについて会話

3歳前～

その場にないこと・過去のことについて会話が可能に

→「どうして～？」への理由の応答ができるように

4歳～就学前後

相手の質問の意図に沿って、順序立ててまとめて話す

と、上記の道のりで育っていきます。

会話の面で弱さのあるお子さんでよくみられるのが、

①質問の意図を理解していない

（例：質問のオウム返しに

尋ねた質問の一部の語で連想した応答に）

②応答がひとこと程度の短い発話になる

③発話がまとまらず、連想に応じて内容がずれていく

④一方的にいいたいことを話してくる

といった状態像です。

効果的な支援としては、何のテーマについて話しているのか、お子さんにとりイメージが付きやすい



ように手がかりを与えることがポイントとなります。まず、抽象的な尋ね方で分からない場合、具体的な選択肢や動作を加えていきます。例えば、「何で遊ぶ？」の質問でぴんとこない場合、「ままごと？ミニカー？」と、具体名を挙げていったり、「遊ぶ？」＋おもちゃを近づける、「遊ばない？」＋おもちゃを遠ざけてバイバイのジェスチャーを加えるなどの工夫で、尋ねられている意味についてお子さんがつかみやすくなると思います。

また、視覚的な手がかりを加えることも有効です。例えば、その日に園であったことを尋ねるときに、園のスナップ写真を用意して、それを見ながら聞いていくと、どこで、だれと遊んだかなど、お子さんが思い出しやすいと思います。また、まとまったストーリーの発話について、脱線しやすいお子さんの場合、内容に沿ってイラストや単語を書き加えていって、話の関係性をチャートにして示すことで、お子さんが自分の伝えていることの全体像がつかみやすくなります。また、一方的に自分のいいたいことを話してくるお子さんの場合、話し相手が提示する質問のテーマを受け入れて共有することが弱いので、まずは、相手の伝えたい話の流れに沿って質問を入れていくと、応答を促しやすいことがあります。

最後に、会話のやりとりへの絵本の利用について、ご紹介します。絵本は、対人的なやりとりを育てていくことから、質問応答の促し、学齢児の文章読解・作文の促しまで、学習の材料として幅広く用いることができます。一般に、絵本を読むと聞くと、大人が読み聞かせるのをお子さんが聴いている図が浮かぶかと思うのですが、私がおすすめするのは、絵本を通して、お子さんとやりとりをしていくような読み方です。以下に、発達に応じた絵本の使い方のアイデアをお伝えします。

①発達年齢2歳以前のお子さん

この年代のお子さんにとっては、絵本は、大人が示していることへの注目を促す⇒大人との持続してのやりとりへと育てていくための良いツールとなります。絵本の読み方のコツとしては、書いてあるセリフをそのまま読むよりも、お子さんの注目が絵本のどこにあるかを確認しつつ、絵の内容を、指差しながら伝えていく読み方のほうがおすすめです。お子さんの注意が長続きすること、そして、いわれて

いることばの意味が理解しやすいためです。

この段階で用いる絵本としては、ストーリーのある絵本よりも、原因⇒結果の繰り返しの絵本のほうが、次の展開の予測がつきやすく、お子さんにとり分かりやすいです。絵の一部のみ見えている絵本や、シール絵本などのしかけ絵本も、お子さんの興味を引くことができます。また、絵本を読みながら、絵で出てくる物事を一緒に示したり、動作を加えることも有効です。

絵本への注目が続くようになったら、「～どれだ？」で指差してもらう、「これなに？」と大人が指差した絵の名称を答えてもらうといった、初期のやりとりの構えを作っていきます。

②発達年齢2歳後半～のお子さん

用いる絵本としては、実生活の流れに沿った内容の、簡単なストーリーの絵本がおすすめです。例えば、2語文などの、つなげた表現を促すのであれば、絵の要素を指差しつつ、「(だれだれ)が～してる」と、文のモデルを示して、同じように指差しながら文を作ってもらうアプローチがあります。また、複文での説明を求める場合、いったん読んだあとに、改めてはじめから、絵を見ながら説明してもらうことをします。このとき、文字が読めて、文章をそのまま読もうとするお子さんもみえるので、その場合は文章を隠して、自分で絵を見ながらことばを組み立ててもらうようにします。

その場にないことについての会話の練習にも絵本は有効です。起承転結のストーリーのある絵本で、いったん読んだ後、特定のページをひらいて、その次の展開（「このあとどうなるんだっけ？」）や、そうなった原因（「どうして泣いてるのかな？」）について尋ねます。まだ応答が難しい場合は、その答えとなるページをみせて、説明してもらいます。

③就学前後のお子さん

就学前後のお子さんの場合、文章の読解や、作文の題材として、絵本を使うことができます。読解について、単語で読んで意味が取れるくらいの読解のレベルのお子さんですと、長い文章を読んでも、逐次読みになってしまい、意味がとれていないことがままあります。このようなお子さんに対して、赤ちゃん向けの短めの文章の絵本を用いて、文章を読んでもらって（例：ねこちゃん ないたね）、その内容

について、答えとなる絵本の絵の部分を隠して、質問に答えてもらう（例：（猫の絵を隠して）「誰が泣いたの？」）、応答できない場合、文章の中で答えとなる単語のみを再度示して読んでもらう（例：「ねこ」のかなのみ示す）ような試みを通して、意味を取りながら読んでいくきっかけ作りをします。文章を読むスピードが遅いお子さんや、ことばの音の記憶が弱いお子さんですと、読んだそばから忘れてしまう場合もあります。その場合、文章の意味単位ごとに、何のことばだったか尋ねて、そのことばの絵を語の横に描いてあげることで、お子さんが文章の意味を取る手助けとする場合もあります。

（例：ねこちゃん  ないたね  ）

また、読むことに苦手意識のあるお子さんの場合、子ども向けのマンガも、人物の表情や状況の情報がある形で、話しことばのセリフを読む形になるので、読む練習として分かりやすい題材といえます。

絵本は、作文の練習にも用いることができます。簡単なストーリーの絵本で、文章は隠した状態でページごとの絵を示し、起こっていることを話合って、キーワードや、簡単な文章でお子さんに書き出してもらいます。書きだしたことばをもとに、適切な接続詞を加えて、流れのある文章にお子さんにまとめてもらうことをします。

最後に、登場人物の気持ちの理解の促しに、絵本を用いることもあります。対人面の理解にハンディのあるお子さんの場合、登場人物の気持ちの理解や、複数の人物や物事の状況を見渡しての関係性の読み取りで、理解が弱い場合があります。登場人物どうしの関わりを描いている絵本を用いて、それぞれの表情と行動、その背景となる気持ちを話しあったり、セリフ  や気持ち  の吹き出しを用いて、書きいれてもらうことを通して、相手の立場や気持ちに思いを向けさせるような試みを具体的には行っています。

以上、お子さんと関わる上でのテクニク的なことのご紹介が中心となりましたが、お子さんと接していく上で、能力を伸ばしていくことのみ注目する形の関わりですと、お子さんにとっては常に試されることが連続の、ストレスの多い環境となります。「できた＝○」「できない＝×」の尺度でのみ測られ

るような関係のもとでは、お子さんによっては、また失敗して注意されるのではと萎縮してしまったり、自尊心を守るために反抗的な態度を示すような自己表現に走ってしまう場合もあります。また、大人側が、何かお子さんにやらせようと、意図的に関わると、敏感に察知して、引いてしまうお子さんも良くみえます。お子さんを育てていく立場のものとしては、ときには焦ってしまう場面もあると思いますが、お子さんのあるがままを受け入れられるようなスタンスで接していくことが、最も大事なのでは、と思っています。どのお子さんも、一緒に無心に遊びこんだときに見せてくれる表情は、とても素敵なものだと思います。

引用文献・参考文献

I. 就園前の時期のことばの遅れについて

ガットステイン 著（2006）RDI「対人関係発達指導法」クリエイツかもがわ

グリーンスパン他 著（2009）自閉症のDIR治療プログラム 創元社

藤田博 編著（2008）障がいのある子との遊びサポートブック 学苑社

Nadel,J. & G. Butterworth (1999) Imitation in infancy . Cambridge University Press, Cambridge.

長崎勤他 編著（2009）自閉症児のための社会性発達支援プログラム 日本文化科学社

II. 就学前のお子さんへの支援について

Landry, S. H. 他（2000）. Early maternal and child influences on children's later independent cognitive and social functioning. Child Development, 71, 358-375.

長澤泰子（1987）機能性構音障害の診断と指導 構音障害の診断と指導 飯高京子 他 編 学苑社

竹田契一 他 編著（1997）LD児の言語・コミュニケーション障害の理解と指導 日本文化科学社

谷地ミヨ子 他 著（2007）絵本で楽しく発達支援 山洋社

平成23年度 西部地域療育センター連続講座のご案内

第2回 講演会

講 師 北部地域療育センター所長 今枝 正行（小児科医）
「発達障害の具体的支援のすすめ方」
日 時 平成23年12月2日（金）PM3：30～5：00
会 場 西部地域療育センター1階 多目的ホール
対 象 保育園、幼稚園、小学校、療育施設、関係機関の職員のかた

..... 講師からのコメント

発達障害の啓発がすすみ、地域での支援の輪の広がりを実感いたしております。今、求められているのは、子どもたち一人ひとりと家庭へのオーダーメイドの支援を、地域の連携のなかでつくり深めていくことだと思います。講演では近年、発達障害領域でわかってきていることと課題とをみなさんと共有したいと思います。

ボランティア募集

保育場面での手助け（室内の活動、園外への散歩など）
教材づくり
保護者活動時における療育児のきょうだいの保育
センター行事（運動会、夏祭りなど）のお手伝い
その他、園の環境整備など

■お問合せ・お申込み■

名古屋市西部地域療育センター